

ネクストエー 建築と社会をつなぐ15人の提言～視点の転換 コミュニティの追求よりも 魂を揺さぶる建築の美を

2008.05.26 日経アーキテクチュア 2頁 第875号 40～41頁 (全1,665字)

「コミュニティ」という言葉を好む設計者やデベロッパーは少なくない。住宅の開発や設計では、「コミュニティをはぐくむような空間をつくる」と積極的に解説したり、宣伝したりする。聞こえは良いが、「果たしてコミュニティは、人々が共同して暮らし、社会をつくる原動力になっているのだろうか」。そう疑問を投げかけるのは、独自の視点で政治学を研究する竹井隆人氏だ。昨年、著書『集合住宅と日本人』を上梓した。興味深い題名だが、建築の専門書ではない。「集合住宅を題材に、日本人の『共同性』に巣食う問題をあぶり出し、新たな『共同性』の可能性を見いだそうとした思想書に近い」と言う。専門とする政治学は「共同性を研究するもの」と説く竹井氏は、大学院時代に人々が共同して暮らす舞台として集合住宅に着目した。以来、コーポラティブ住宅の事業企画など、一貫して「まちづくり」にかかわりつつ、政治学の目で建築を眺めてきた。そのなかで、建築界が好む「コミュニティ」の意味や手法に疑問を感じるようになった。「気軽に使われるコミュニティという言葉や、コミュニティスペースと銘打った共用空間は、必ずしも『共同性』を喚起しておらず、設計者の自己満足に終始しているケースが目立つ」。

建築界の言うコミュニティと、竹井氏の「共同性」との間にはだいぶ隔たりがあるようだ。竹井氏いわく、「たとえコミュニティが生まれたとしても、『仲良しクラブ』の域を出ず、気の合う仲間だけが一定の時間や空間だけを共有したり、表面的な社交にとどまったりするのではないか」と言う。竹井氏は、共同性を生む母体になり得ない「コミュニティ」が、社会的に持つ意味に対して疑問を投げかけているのだ。

では、竹井氏の言う「共同性」とは何なのか。かみ砕いて言えば、秩序ある社会を築き、維持していくためのルールを生み出せる人間同士の関係、とでもなるだろうか。建築界には、建築界のルールがあるように、地域や会社など様々な形を取る人間の共同体が、一定のルールを定めて営まれる。その人間関係は、必ずしも仲良しばかりではない。仲の良くない間柄もあるし、見知らぬ者同士が存在していることもある。しかし、そこに共同性がある限り、個人の自由や権利を認めつつも、勝手気ままな振る舞いに一定の制約をかけて、社会の秩序を守っていくことができる。そうした共同性は「建築界が取ってきたコミュニティの手法では得られない。そもそもコミュニティという言葉の意味を取り違えていないか」。むしろ竹井氏は、「コミュニティの追求よりも、純粹に建築の美を追求したほうが、人々の共同性を誘発するのではないか」と言う。いたずらに奇抜だけを競い合うのではなく、街並みを意識した上で個々の美を追求すれば、やがてその街並みを大切に守っていこうとする共同性が生まれてくる。その共

同性は、最終的には街並みを守る「政治」になる。幼いころ、出身地である京都の市街を東山から見下ろした様子や、ビルのスカイラインがそろった大阪・御堂筋の街並みに、竹井氏は美しさを感じるという。写真に残る幕末の江戸の街にも、「魂が吸い込まれるような感覚に襲われる。おそらく何らかの規制ができ、それを守らせた政治のたまものだろう」と言う。こんな竹井氏の提言を、今の建築界はどうとらえるだろうか。
(松浦隆幸)

自律社会が生んだ江戸の景観幕末に來日した英国の写真家、フェリックス・ベアトが撮った「愛宕山(現在の東京・港区愛宕)から見た江戸のパノラマ」。黒々とした屋根の続く荘厳な街並みを、竹井氏は評価する

日本人特有の共同性を考察2007年に出版した『集合住宅と日本人』(平凡社)。日本人の「共同性」の特質をあぶりだし、建築界の言う「コミュニティ」に異を唱える

竹井隆人(たけいたかひと):1968年京都市生まれ。東京大学大学院法学政治学研究科修士課程修了(政治専攻)。博士(学術)、政府系金融機関職員。著書に『集合住宅デモクラシー』(世界思潮社)ほか、共著・訳書多数。学習院大学講師、日本政治学会年報委員などを歴任

【日経アーキテクチュア】

日経BP社